大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

三千年紀の総合情報センター：豊かなオアシスを目指して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 天羽, 均
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/11087

三千年紀の総合情報センター
―豊かなオアシスを目指して―

総合情報センター所長　天羽　均

2000年を迎えるにあたり、Y2K問題という思わぬ伏兵に世界中が振り回されたことは記憶に新しい。キリスト紀元1000年は最後の審判を前に至福のときがおとずれるという千年至福説ミレニアムにより特別な年とされ、紀元2000年は二千年紀、2度目のミレニアムの到来、教皇庁ではカトリックの聖年ジュビリーとする。99は最後の数であり、ご破産で00から始まる2000年代の幕開けを祝いたいというので、あたかも新世紀の始まりのごとく、年越しのシルベスターナイトは世界各地でお祭り騒ぎとなった。西暦紀元0年など存在しないから、20世紀最後の年であるという解説は、ミレニアムの至福説に人類の新たな未来への出発を見ようという希望にかき消された。

もっとも、前夜までは、終末の到来というので、ノストラダムスや世紀末思想が総動員され、その最新現代版がY2K問題であった。こちらは1900年に逆戻りという過去の時間へのタイムスリップである。100年を世紀と呼ぶように1000年を千年紀で表すなら、来年2001年は三千年紀（3度目のミレニアムへ）の幕開けである。

コンピュータ誕生のときには思いもかけなかった？2000年の到来は、わずか数十年の未来も予想できなかった人間の想像力の欠如を表すとともに、デジタル時代の進展の予想外のスピードに右往左往し、電気、ガス、水道のない時代への回帰という、バーチャルパニックにあわてふためく状況を、いささかコミカルに描いて見せた。年末から新年にかけて、ヨーロッパでは時ならぬ暴風雨という自然災害が、Y2K問題をはるかにしのぐ猛威で、このバーチャルリアリティを吹き飛ばす様相が衛星放送で生々しく伝えられた。（その後の報道では、フランスのヴェルサイユ宮の庭園の被害だけでも3億フランにのぼり、世界中からインターネットで復旧援助の申し出が集まっているという。）

総合情報センターにとっては、Y2K問題は1999年度に始まった本学の「情報化元年」のいわば総点検でもあった。万全の備えを確信しながらも、情報システム部ではスタッフが、2000年の黎明はシステムを見守りながら迎え、その無事を見届けた。98年度末に完成したキャンパスネットワークによって、Y2K問題も、個々の部局、研究室だけの問題ではなく、全学ネットワークに関わる問題となっていたからである。

1999年度は、4月以来、情報処理システムが更新され、キャンパスネットワークとこれに平行する図書館システムのネットワークが順次走り出した。ほぼ一年間にわたって、その正常な運営を見届けた上で、2000年3月末には「総合情報ネットワークシステム暫定要領」の廃止を含み、新たに情報処理、情報ネットワークそれぞれのシステムに関わる学内の利用規程、細則の整備を行い、慣らし運転期間はクリアーしすべて整うこととなった。

Y2K問題が、未来を見通していたはずの情報化社会に、思わぬ波紋を投げたのは、情報化のスピードと広がりが当初の予想を大きく上まわったからに他ならない。総合情報センター発足以来の悲願であったキャンパスネットワークの完成と平行して行われた総合情報センターの情報処理システムの大型汎用機という巨人から、ワークステーションとパーソナルコンピュータによる分散処理システムへの転換は、情報環境の領域でのめざましい技術革新の一端であった。それは、6年前に、いち早く総合情報センター創設に踏み切った当時の見通しをこえたものであるが、絶えず新たな地平を開拓するという、センターに課せられた使命をますます重要なものにする。

汎用コンピュータから、分散処理システムへ変革に象徴されるように、今後は、集中と分散のシステムの制御がネットワーク時代の基本的な課題となる。各学部、研究所の図書室職員（司書）が、総合情報センターに一元化され、ネットワークを構成するのも、この流れと軌を一にする。このことはもちろん、単にキャンパス全体にLANが設置されたというハードの問題だけで可能になったのではなく、2期に及ぶ学術情報基盤整備専門部会における長時間にわたる議論の成果である。今後は、このネットワークをいかに情報収集および情報創生、発信の有効な基盤として整備発展させていくかによって、大学の質そのものが問われることになる。

さらに、情報通信処理の分野で進行しているデジタル化によって情報の管理が量的にも質的にも飛躍的に拡充することは、DVDやデジタル放送開始で身近な問題として、盛んにマスメディアでも論じられている。図書館の電子化もわれわれが緊急に取り組まねばならない課題である。学術情報の整備という点では、OPACにWebでのアクセスが可能になり、データベースの共有環境が整ったが、ともすれば忘れられているのは、大阪府立大学のみならず全国の大学図書館で、所蔵図書の多くがまだデータ化されていない、ネットワークが整備されても蔵書検索できるのは、実は一部の図書でしかないという事実である。そして今のところ、しかも当分の間、その完全なデータベース化、すなわち遡及入力は人手によるしかない。情報化社会の、ウサギとカメの競争である。

また、電子図書館が学術情報の基盤として、今後重要な役割を果たすことは論を待たない。デジタル化は既存のデータベースへの多様なアクセスを保証するが、その情報を組織し、新たな思考を生み出すのは人間なのである。情報処理教育がリテラシー教育から、新たな情報組織化、独自のネットワーク構築のための専門領域と結びついた、より高度なものへ脱皮するよう求められている。

IT革命は今日、流通、経済など各方面にバブルとも言われる影響を与えている。移動体通信の飛躍的発達とともに、インターネットがますます個々人をつなぐ媒体として発展していくなかで、コミュニケーションのデジタル化により、人間同士のつながりがバーチャルなものになることにとまどいといらだちがあるのも事実である。昨年9月から、大学図書館の宿題の一つであった日曜開館が行われ、さいわい好評を得ている。保存図書の集中化により総合情報センターの機能への関心も高まっている。広大な砂漠の中で、移動体通信は大きな威力を発揮するが、砂漠の移動に疲れた人々の心を癒し、あらたな発想を生み出すオアシスの役割を忘れてはならない。総合情報センターの「総合」に含まれている意味は今後ますます多様かつ重要になる。